

生物資源を活用した地域創生（グローバルバイオ）研究部会 グローバルバイオシンポジウム開催報告

（生物資源を活用した地域創生（グローバルバイオ）研究部会 幹事）
古賀 雄一

本研究部会では、製品評価技術基盤機構（NITE）、三菱UFJリサーチ&コンサルティングの後援を得て、グローバルバイオシンポジウム「バイオ民主化時代の到来と地域発イノベーションの加速」を、3月23日（土）に大阪大学医学工学研究科東京ランチにて開催いたしました。

アーティストとしてバイオテクノロジーを活用しているGeorg Tremmel氏（東京大学）と福原志保氏（Google 合同会社）に、DIYバイオ実践の場として創設されたBio club (<http://bioclub.org/>) や、Bio Artの広がりとその意味についてご紹介いただいたほか、菊池隆裕氏（日経BP 総研）には、フードテックの未来についてご講演いただきました。技術の民主化とそれに伴う食のビジネスプラットフォームの形成と規制について日本社会の課題であることを認識することができました。阿部敬悦先生（東北大学）には、東北地区における食品研究開発プラットフォームの形成と運用を、事例を交えてご紹介いただきました。中小企業と大学の連携の仕組みやそこに求められる研究者の役割について非常に参考になるお話を伺いました。本研究部会の古賀（大阪大学）から研究部会が取り組む課題の社会的背景を紹介したうえで、地域生物資源としての微生物の活用について講演いたしました。講演会の最後は、照井保幸氏（NITE）からNITEの地域産業支援への取組みをご紹介いただいたほか、6月に始まる微生物のワンストップデータベースなどの興味深いサービスをご紹介いただいた。NITEが規制するだけの機関ではなく、バイオ事業を応援してくれる存在であることがわかりやすく紹介されました。

シンポジウム後半は、講演演者に加え、小柳智義氏（筑波大学）、川崎浩子氏（NITE）、仲嶋翼氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング）に登壇していただき、「バイオ民主化時代に必要とされる支援プラットフォームについて」をテーマにパネルディスカッションを行いました。パネラーのみならず会場からも積極的な発言があり中身の濃い議論ができました。バイオテクノロジーに対するニーズの増加、技術的革新、バイオに触れる機会の増加など、バイオテクノロジーへのアクセシビリティが増加する中で、人と人が顔を合わせて目利きする力を育て、その力を発揮する場を形成することが必要であることがわかり、今後の研究部会活動の意義を改めて認識させられる機会となりました。

開催概要はHP (https://www.sbj.or.jp/event/division_global_sympo_20190323.html) にてご確認ください。



パネルディスカッションの様子（左から、福原志保様、Georg Tremmel様、小柳智義先生、阿部敬悦先生、筆者、照井保幸様）